

## Antony and Cleopatra における「絶対」と「相対」

細 川 眞

### I

四大悲劇の後、1606～07年に書かれた *Antony and Cleopatra* は、大雑把に言えば *Richard II* と *Othello* の世界を併せたような作品である。*Richard II* は政治がテーマであり、*Othello* は愛がそのテーマになっている。前者のポイントは、政治を疎かにした Richard 王が有能な Bolingbroke に権力を奪われていく中で、政治で成功する Bolingbroke は appearance と reality の異なる策士家である一方、己の欠点のために滅びる Richard の方が人間的に純粋であるという点である。後者の方は、*Othello* と *Desdemona* の理想的な愛が外的力によって亀裂が生じ、*Othello* が *Desdemona* を疑うという形で、愛の絶対性が相対化されていくというのが劇の中心となっている。この拙論で扱う *Antony and Cleopatra* はローマとエジプトが舞台で、前者は政治の世界、後者は愛の世界をくり広げている。そして、この作品が他の二作品と類似している点は、ローマでは権力者 Antony が *Richard II* のように政治を忘れたために、有能な Octavius Caesar に滅ぼされ、エジプトでは *Othello* が *Desdemona* を疑ったように、Antony と *Cleopatra* の愛はお互いによって疑われ相対化されているという点である。愛の世界に関して言えば *Antony and Cleopatra* は *Othello* の続き、というより *Othello* の後半部（愛の疑い）から劇が始まっているようだ。勿論劇は *Othello* と同じように、愛は疑われ相対化の危機に直面するが、最後には愛は回復し愛の絶対性が証明されることになる。ローマの世界とエジプトの世界は、このようにただ単に概要が *Richard II* と *Othello* に似ていると言うだけではない。両世界を「絶対」と「相対」という価値の観点から見た時、他の二作品のように両価値は衝突し最後に価値は逆転するのである。つまり劇構造として、劇の前半では、政治の世界において Caesar が正義の士として絶対化される一方、Antony は政治秩序を乱すものとして非難され、その存在を相対化される。そして更に愛の世界では Antony と *Cleopatra* の愛は低次元の情欲の愛だと人々に批判され、その価値を相対化される。ところが劇の後半になると Caesar の「正義」が、言いかえれば政治における「正義」が相対化されるようになり、これに反比例するように Antony と *Cleopatra* の愛の絶対性が主張され

てくる。そして最後に二人の愛の絶対性によって Caesar の「正義」が完全に相対化され、まやかしものであったことが証明されるのである。つまり政治の勝利が愛の勝利の前に見事に屈服してしまうのだ。そこで以下においてその経緯を詳しく論じてみたい。

### II

劇の構造を考えてみると、この劇は三幕七場の Actium の戦いで前半と後半に分かれる。そしてこの戦いで Antony の政治的失脚が決定し、Caesar の「正義」が勝利を収めるのである。しかもその結果は、水が低きに流れるように至極当然の成行なのだ。というのも、Antony は執政の一人としてローマの政治に大きな責任があったにもかかわらず、それを忘れてエジプトで *Cleopatra* に夢中になっていたからだ。そのために劇の冒頭から Antony はローマの人々によって批判される立場におかれ、一種の政治悪として出発している。

Phi. Nay, but this dotage of our general's  
O'erflows the measure: those his goodly  
eyes,  
That o'er the files and musters of the  
war  
Have glowed like plated Mars—now  
bend, now turn,  
The office and devotion of their view  
Upon a tawny front: his captain's heart,  
Which in the scuffles of great fights  
hath burst  
The buckles on his breast, reneges all  
temper,  
And is become the bellows and the fan  
To cool a gipsy's lust. (1.1.1-10)

このように軍神 Mars のように偉大だった Antony が、今ではジプシー女の情欲を冷やすふいごになってしまったと、その変貌ぶりを友人にも軽蔑される始末なのである。一方 Caesar はそうした墮落を正す「正義」の立場にある。彼にとって Antony は、“A man who is the abstract of all faults/That all men follow” (1.4.9-10) というように悪の権化に見え、その悪が彼

個人にだけ悪影響を及ぼすのなら黙認しようが、それが他人に、国家に害を与えるから許せないと、国家的見地から Antony を非難する。というのも今ローマは Pompey が反乱を起こして政治的危機にあるからである。

Caes. ....yet must Antony  
 No way excuse his foils, when we do bear  
 So great weight in his lightness. If he  
 filled  
 His vacancy with his voluptuousness,  
 Full surfeits and the dryness of his bones  
 Call on him for't: but to confound such  
 time  
 That drums him from his sport and  
 speaks as loud  
 As his own state and ours—'tis to be  
 chid  
 As we rate boys, .....

(1.4.23-31)

劇の前半は、政治悪の Antony が「正義」の Caesar に攻撃されるパターンが続々と続く。二幕二場の二人の論争はその一つで、そこでは Antony は被告の席にすわり、「正義」の検事 Caesar によって彼の過失が一つ一つと告発されるのである。それを見てみると、先ず第一に Antony の妻 Fulvia と弟の Lucius が Caesar に反旗を翻した事件に関して、その背後には Antony がいたのではないかという疑い、第二に Antony がエジプトで Caesar の使者を嘲り彼の手紙を無視したこと、第三に Antony は、必要な時は Caesar に武器を貸し援助するという約束を破ったこと、などである。これらの告発に対し Antony は自らの潔白を弁明するが、いづれにしろ Antony の方に落度があったことは否めない。Caesar が「正義」、Antony が「悪」の図式を一等強調しているのが、Antony と Octavia の結婚問題である。Antony は Caesar と和解するため Caesar の姉 Octavia と結婚した、ところがすぐに彼女を裏切って Cleopatra の元に帰ってしまうのである。

Ant. And though I make this marriage for  
 my peace,  
 I'th 'East my pleasure lies.

(2.3.39-40)

元々この結婚は、Enobarbus が指摘するように政略結婚で両者の政治的妥協にすぎないから (“I think the policy of that purpose made more in the marriage than the love of the parties.” 2.6.117-18) ,

早晩破綻をきたしたであろうが、Antony も納得の上 Fulvia を妻とした以上、それを即刻裏切るのはいくら責められても仕方がない。この事件によって劇構造として Caesar が完全に「正義」を代表し、Antony は「悪」となってしまうのである。Caesar 自身自らの「正義」を次のように自認している。

Caes. You are abused  
 Beyond the mark of thought: and the  
 high gods,  
 To do you justice, make his ministers  
 Of us and those that love you.

(3.6.86-89)

この事件と共に Antony はローマの人々を怒らせる問題を起こしてしまった。それは *Plutach* にもあるように<sup>1</sup>, Antony はローマを無視して勝手に Cleopatra やその子供達にエジプトなどのローマの占領地を与えてしまったのである。こうしたことから Antony と Caesar の間で Actium の戦いが起こるが、結果は一目瞭然となる。というのもその戦いぶりが Scarus に批判されるように、彼は武よりも愛を優先させてしまったのだ。

Scar. She once being luffed,  
 The noble ruin of her magic, Antony,  
 ....., flies after her:  
 Experience, manhood, honour, ne'er  
 before  
 Did violate so itself.

(3.10.18-24)

こうして Antony は、Actium の戦いで政治家、武人としての信頼を全く失い、情欲のために世界を失なったとして (“We have kissed away / Kingdoms and provinces.” *Ibid.* 7-8) , 家臣からも見放される。

### III

以上みてきたように劇の前半は、政治の世界では Caesar が「正義」、Antony が「悪」という構造が成立するが、愛の世界の方はどうであろうか。Antony と Cleopatra の愛は設定されている状況が *Othello* と似ているが、形態としては *Othello* と *Desdemona* の愛とはかなり違う。両者の類似点は、愛が社会から白い眼で見られ “lust” として評価されている点だが、当時者同志の見方となると全く異なる。*Othello* と *Desdemona* の愛は、お互いが相手を絶対化し、そこには一寸の亀裂も見られない理想的な愛の形となっている。従って劇を見る観客は、世間の評価の方が間違いで、二人の愛は二人がそう信じているように絶対的な強い愛だと判断できる (*Othello* の嫉妬以前までは) 。ところが Antony と

Cleopatra の場合は、世間の評価が観客の評価になりかねない要素を含んでいるのである。というのも二人の愛には最初から亀裂があって、一方が相手を疑うという相対化された愛となっているからだ。面白いことに劇の前半では Cleopatra が Antony の愛を疑い、後半になると逆に Antony が Cleopatra を疑うようになる。

そこで前半だが、Antony の方は Cleopatra に夢中で、彼女に彼の愛の絶対性を告白するが、Cleopatra は容易に信じずそれに疑いを持つ。

Ant. Let Rome in Tiber melt, and the wide  
arch  
Of the ranged empire fall! Here is my  
space.  
Kingdoms are clay: our dungy earth  
alike  
Feeds beast as man: the nobleness of  
life  
Is to do thus: when such a mutual pair  
And such a twain can do't, in which I  
bind,  
On pain of punishment, the world to  
weet  
We stand up peerless.

Cleo. Excellent falsehood!  
Why did he marry Fulvia, and not love  
her?

(1.1.33-41)

Antony にしてみれば、Cleopatra は彼にとって宇宙であり、Bradley が “When he meets Cleopatra he finds his Absolute”<sup>2</sup> と言うように「絶対」なのであるが、Cleopatra にすれば彼に Fulvia という妻がいる以上その絶対性を顔面どおりには受け取れない。二人の愛の特長的な事は、二人共恋愛のベテランであって、そのために過去あるいは現在の他の異性関係で二人の愛が常に相対化される状況にある、という点である。この点が他の愛の劇とも大きく異なっていて、*Othello* にしても *Merchant of Venice* にしても *Romeo and Juliet* にしても、恋人達には新鮮さがあり、お互いが相手を「絶対」だと思っている。ところが二人は、Bradley が “At the very first they came before us …………… in a glory already tarnished, half-ruined by their past” と言うように<sup>3</sup>、最初から半ば色あせた栄光の中で現れるのである。Romeo と Juliet の愛が一点の汚れもない純粋な若者の愛であるとするなら、二人の愛は愛の醜さも知った中年の少し官能的な愛なのである。それ故人を愛するには慎重で、相手を自分のものにするこ

とを望みながらも、常に相手を警戒し相対化するようになる。Cleopatra が Antony を疑うのもその表われだ。私達が観客として評価した場合、Cleopatra に対する Antony の愛の絶対性は嘘でなく真実であると判断できるが、劇中の Cleopatra にしてみれば、Antony のそうした状況から Fulvia の存在と自分を比較するのは無理もない。彼女にすれば、結婚には愛が伴っているはずであり、なのに自分がすべてだと言うから Antony の言葉は嘘に聞える。この劇には、「相対化」のモチーフを強める技法や言葉がいくつかあるが、その一つとして鏡のイメージがある。Antony が妻の Fulvia の死に接し涙を見せない時、Cleopatra は

Cleo. O most false love!  
Where be the sacred vials thou shouldst  
fill  
With sorrowful water? Now I see, I see,  
In Fulvia's death, how mine received  
shall be.

(1.3.62-65)

と、Fulvia の死を自分の場合の鏡とみる。つまり Antony が、かって愛していた妻にとったこの冷たい態度は、今彼がいくら情熱的に Cleopatra に愛を表明しようとも、彼女が死んだ時の Antony の彼女に対する態度に思えてくるのである。更に今一つ、Cleopatra が Antony の愛を疑わざるをえない状況が生じる。それは Antony が Octavia と結婚したことで、この事を知った時 Cleopatra には Antony という存在が相対化されて、残酷な Gorgon と偉大な Mars の二つの顔を持った Appearance と reality の異なる人間に見えてくる。

Cleo. Let him for ever go! let him not—  
Charmian—  
Though he be painted  
one way like a Gorgon,  
The other way's Mars.

(2.5.115-17)

このように、二人の愛は常に相対化される危険にさらされていて、一步間違れば *Othello* のような悲惨な結末に陥る可能性は大いにある。ただこの作品は *Othello* と違って、愛は危機にさらされながらも *Othello* のようにはすぐ破局に向かわない粘り強さがある。その粘り強さはどこから生まれてくるかと言えば、それは、二人共過去に恋愛の経験が豊富なので愛の恐さを知っており、愛を客観化できるからであろう。その証拠に Antony は Cleopatra に夢中になりながらも、彼女への愛に溺れることの危険を感じているし、 (“These strong Egyptian fetters I must break, / Or lose myself in dotage.”

1.2.117-18), Cleopatra は Cleopatra で Antony に裏切られたと思った時ですら、その原因は Antony に過度に熱を上げた自分にあるんだと自省する余裕がある。

Cleo. These hands do lack nobility, that  
they strike  
A meaner than myself; since I  
myself  
Have given myself the cause.  
(2.5.82-84)

今まで Antony の愛を Cleopatra が疑うという視点から二人の愛の相対化を述べてきたが、この事は、二人の愛は社会が評価するような “lust” があったということの意味しない。Antony にとって Cleopatra は “my space” で、その愛は、包み込むには “new heaven and new earth” を必要とする程荘大なものであるし、一方 Cleopatra にしてみても、Antony は “The demi-Atlas of this earth, the arm/And burget of men” (1.5.23-24), “O heavenly mingle!” (Ibid. 61) というように偉大な神に近い存在なのである。そして二人の愛には、後で確実になる永遠性、至高性の兆候すらあった。

Cleo. Eternity was in our lips and eyes,  
Bliss in our brows' bent; none our  
parts so poor  
But was a race of heaven:  
(1.3.35-37)

けれどもその愛はまだ、世俗を超越した永遠の絶対的な愛のレベルには発展しておらず、地上の愛のもつ、移ろいやすさ、疑い、裏切り等の試練を受けている段階なのである。それが前半では、Cleopatra が Antony を疑うという形で現われていると言える。そして後半では逆に、Antony が Cleopatra を疑い、その愛を相対化してしまうのである。

#### IV

前述したように Actium の戦いが劇を前半と後半に分けていて、この戦いで Antony は落ち目になり Caesar が大躍進する。このような力関係の中で、Cleopatra が Antony を裏切って Caesar の保護を求めようとする動きが生じる。それが顕著に窺えられるのは、Cleopatra が Caesar の使者 Thidias の手にキスをして彼への恭順の意を表わす時だ。

Cleo. Most kind messenger,

Say to great Caesar this: in deputation  
I kiss his conqu'ring hand; tell him, I  
am prompt  
To lay my crown at's feet, and there to  
kneel:  
Tell him, from his all-obeying breath I  
hear  
The doom of Egypt.

(3. 13. 73-78)

この場については、K. Muir が “In the Thidias scene, it is not certain whether she is intending to desert Antony or not”<sup>4</sup> と言っているように Cleopatra の真意は曖昧で、彼女はただ外交辞令で Caesar におべっかを言っているに過ぎないのか、それとも本気で彼に身を委ねようとしているのかどちらとも断定できない。ただはっきりしている点は、裏切られたと怒った Antony に対して、

Cleo. Ah, dear, if I be so,  
From my cold heart let heaven engender  
hail,  
And poison it in the source, and the  
first stone  
Drop in my neck: as it determines, so  
Dissolve my life! the next Caesarion  
smitel!  
Till by degrees the memory of my womb,  
Together with my brave Egyptians all,  
By the discandying of this pelleted storm  
Lie graveless, till the flies and gnats of  
Nile  
Have buried them for prey!

(3. 13 157-67)

と、彼女が荘大なイメージを使って彼への愛を強く主張していることである。おそらく彼女には迷いがあり、Antony への愛情は不変である一方、世俗的な欲求—エジプト女王の地位の維持—も満たしたかったのだろう。そして不運なことにも彼女自身、疑われるに十分な恋愛経験が過去にあるのだ。

Ant. I found you as a morsel cold upon  
Dead Caesar's trencher, nay, you were  
a fragment  
Of Gnaeus Pompey's; besides what  
hotter hours,  
Unregistered in vulgar fame, you have  
Luxuriously picked out:

(3. 13 116-20)

Antony にしてみれば Cleopatra の男遍歴 (Julius Caesar から Gnaeus Pompey, そして自分へと) を思いだせば、彼女が零落れた自分から飛ぶ鳥を落す勢いの Caesar に心変わりしたとしても何ら不思議には思えない、否、そういう目で見れば至極当然のように思えてくるのである。この劇では Cleopatra の場合にせよ、Antony の場合にせよ恋人を疑うに十分納得のいく背景が設定されているのだ。この点が *Othello* の場合と根本的に異なる。また *Othello* と違って、一度の疑いが即悲劇に発展しない。というのも Cleopatra には、Desdemona にはない弁明の機会があり、そしてそれが真実か嘘偽かを見分ける冷静さが Antony にはあるからだ。それ故二人の愛は一度は回復し、お互いが今にも瓦解しそうな愛を守っていかうとする努力も見せる。

Cleo. But since my lord  
Is Antony again, I will be Cleopatra.  
Ant. We will yet do well.  
(Ibid. 186-89)

この後、再度 Antony は Caesar に戦いを挑むが無残にも打ち破られる。そしてこの時、味方の艦隊が敵の艦隊と帽子を投げ合って喜んでいるのを見て、再び Cleopatra が裏切ったと、彼女の愛を疑うことになる。

Ant. This foul Egyptian hath betrayed me:  
My fleet hath yielded to the foe, and  
yonder  
They cast their caps up and carouse  
together  
Like friends long lost. Triple- turned  
whore! 'tis thou  
Hast sold me to this novice, and my  
heart  
Makes only wars on thee.  
(4. 12. 10-15)

今回の真相は明白で、*Othello* の場合と同じように Antony の誤解であり、Cleopatra と Caesar が通じている事実はなかった。この事は Diomedes が後に Cleopatra の偽装自殺の理由と共に、

Dio. She had a prophesying fear  
Of what hath come to pass: for when  
she saw—  
……………—you did suspect  
She had disposed with Caesar, and that  
your rage  
Would not be purged, she sent you word  
she was dead:  
(4. 14. 120-24)

と Antony に説明しているから間違いない。今回の疑いには *Othello* の場合とよく似た、一種の大きなアイロニカルな劇的效果がある。それは、ただ単に主人公が誤解をもとにして恋人を疑ったという問題に終らず、これをもとに主人公が共通の深い哲学を悟るという効果だ。その哲学は、現世の相対性であって、この世には絶対はないというペシミスティックな認識である。裏切られたと思った Antony は先ず、

……………and the queen—  
Whose heart I thought I had, for she  
had mine,  
Which whilst it was mine, had annexed  
unto't  
A million moe, now lost—  
(Ibid. 17-20)

と愛の実体のなさ、相対性を嘆き、そして日没時の変幻自在の雲のイメージを使って比喩的に現世の虚無、相対性に目覚めるのである。

Sometimes we see a cloud that's dragonish  
A vapour sometime like a bear or lion,  
A towered citadel, a pendent rock,  
A forked mountain, or blue promontory  
With trees upon't, that nod unto the world  
And mock our eyes with air: thou hast seen  
these signs;  
They are black Vesper's pageants.  
(4. 14. 2-8)  
……………now thy captain is  
Even such a body: here I am Antony,  
Yet cannot hold ths visible shape, my  
knave.  
(Ibid. 12-14)

劇はこの時点から正面に、「相対」と「絶対」の価値論をもちだしてきて、愛の世界と政治の世界を対照させ、そして Antony と Cleopatra の愛の絶対性によって Caesar の正義を相対化するという展開を辿る。

Cleopatra の誤解をもとに深い世界認識に達した Antony であったが、彼女の死を聞いて皮肉にも、彼女の愛はその認識に当嵌らない「絶対性」の愛であった事を知ることになる。ここでは彼女の死が偽装であった点は問題にしなくてもよいだろう。というのも、いずれにせよ Caesar に敗北した二人にとって残された道は死しかなかったからである。Caesar は、Antony の屈辱的な請願 (“he salutes thee, and/Requires to live in Egypt……” 3. 12. 11-12) を、“I have no ears

to his request.” (Ibid. 20) と冷たく拒否しているのからわかるように、きっと Antony を殺してしまっただろうし、Antony との愛が回復した Cleopatra は、Caesar にたとえ命を助けてもらおうとも、Antony の後を追って死を選んだはずである。こうして現世の mutability を悟った Antony は来世の永遠性を信じ、Elysium での二人の幸福、人も羨む愛の絶対性を確信して自殺をする。彼にとって死は、地上的レベルにおける Caesar への敗北を意味するのではなく、それは二人の愛を永遠に絶対的なものにするもので、移ろいやすい現世では成就しなかった二人の愛の天上の結婚式なのである。Julian Markels も “his death comes, …………… not as dissolution but as transcendence, a sign of his having approached as close to immortality……”<sup>5</sup> と死によって Antony が “immortality” に達したと指摘している。

Ant. ……………but I will be  
A bridegroom in my death, and run into't  
As to a lover's bed.  
(4.14. 99-101)

一方 Cleopatra も Antony の死を契機に大きく生長する。彼女は Thidias との会見の場で見られたように、まだ世俗的な欲望もあった。しかし Antony の死に接して初めて現世の虚しさ、相対性を知るのである。Antony という「絶対」、 “The crown o'th' earth” (4. 15. 63) がいなくなった世界は秩序、階級がなくなりすべてが相対化されて、

…………… young boys and girls  
Are level now with men: the odds is gone,  
And there is nothing left remarkable  
Beneath the visiting moon.  
(4. 15. 65-68)

無価値な、もはや生きるに値しない豚小屋に見える (“shall I abide/In this dull world, which in thy absence is/No better than a sty?” Ibid. 59-62). D. Wilson も Antony や Cleopatra の、この現世に対する軽蔑に注目していて、それは一種の “stoicim” であると言う。とにかく彼の言うように、こうした現世の嫌悪、相対化がこの劇のライト・モチーフであることは間違いないだろう。

…………… the exception being the aforesaid  
contempt they both express for this ‘little  
O, the earth’, and even that Shakespeare  
might have explained, had Jonson taxed

him with it, as a kind of stoicism. In any case, it constitutes one of the leitmotives of the play.<sup>6</sup>

## V

劇はこの後、Cleopatra が自殺するまで二場与えていて、そこで彼女と Caesar がお互いに相手を欺く駆引をする中で、最後に彼女の愛の殉死が現世で絶対者になった Caesar を相対化するという展開となる。

Cleo. 'Tis palty to be Caesar;  
Not being Fortune, he's but Fortune's  
knave,  
A minister of her will: and it is great  
To do that thing that ends all other  
deeds;  
Which shackles accidents and bolts up  
change;  
Which sleeps, and never palates more  
the dung,  
The beggar's nurse and Caesar's.  
(5. 2. 2-8)

今や Cleopatra にとり現世は卑しい “dung” であり、その中で Caesar のように運命そのものにはなれず、運命の奴隷としてその有為転変に左右されるよりは、永遠で不変の死の世界を選ぶ方が偉大なのである。所詮 Caesar は世界の絶対者になろうがその絶対は、永遠の世界から見れば相対に過ぎない。愛の永遠性に比べれば、政治の栄光は脆い一時的なものだ。このように Caesar の権力者としての絶対性が黙示録的視点から相対化されているが、そこまでいかなくとも彼の「正義」自体が、劇の後半では相対化されて、欺瞞に満ちたものであったことが明らかにされている。その一例として、Caesar が Pompey と和解したにもかかわらず彼を攻撃して滅ぼし、更にそれに協力した仲間の Lepidus をも失脚させてしまう事件がある。

Eros. Caesar having made use of him in the wars 'gainst Pompey presently denied him rivalry, would not let him partake in the glory of the action, and not resting here accuses him of letters he had formerly wrote to Pompey; upon his own appeal, seizes him: so the poor third is up, till death enlarge his confine.  
(3. 5. 7-12)

政治の世界における現実、大儀として「正義」をもち

ですが、実質はこのように自己の利益を求める醜い権力闘争であり、Enobarbus が言うように最後の一人が残るまでそれが続くのである。

Eno. Then, world, thou hast a pair of chaps,  
no more;  
And throw between them all the food  
thou hast,  
They'll grind the one the other.  
(Ibid. 13-15)

こうしてみると Bradley が示唆するように、Antony と Octavia の結婚は彼の陰謀だったのかもしれない。

……………When, then, he proposed the marriage with Antony……………, was he honest, or was he laying a trap and, in doing so, sacrificing his sister? Did he hope the marriage would really unite him with his brother-in-law; or did he merely mean it to be a source of future differences……………? ……………If I were forced to choose, I should take the view that Octavius was, at any rate, not wholly honest;<sup>7</sup>

つまり Caesar は Antony が Cleopatra のために必ず Octavia を裏切ると予想して結婚を勧めた。そして Antony が Octavia を捨てれば、まさしく「正義」の名において彼を攻撃できる口実ができるのだ。この政治の世界における「正義」というものがいかに見かけだけであるかは、Pompey の反乱事件が見事にその戯画となっているような気がする。Pompey は反乱を起こした時、その理由として次のように「正義」を口にする。

Pom. What was't  
That moved pale Cassius to conspire,  
and what  
Made the all-honoured honest Roman,  
Brutus,  
With the armed rest, courtiers of beautiful freedom,  
To drench the Capitol, but that they would  
Have one man but a man? And that  
is it  
Hath made me rig my navy, ……………  
……………with which I meant  
To scourge th'ingratitude that despiteful  
Rome

Cast on my noble father.  
(2. 6. 14-23)

彼は、独裁者 Julius Caesar を殺害した Cassius や Brutus を「正義」の士とみて、それと同じように自分も、「正義」のために父に対するローマの志恩に復讐をするのだと言う。一応彼の大儀は立派なものであるが、彼の本心はどうかと言えば、それは利己的な権力欲にすぎなかったのである。この事は、彼と三執政が船上で宴会を開く時に明らかになって、彼の盟友 Menas が三人の暗殺を密かに勧めた時、彼は

Ah, this thou shouldst have done,  
And not have spoke on't!……………  
……………Repent that e'er thy tongue  
Hath so betrayed thine act: being done  
unknown,  
I should have found it afterwards well done,  
But must condemn it now.  
(2. 7. 73-80)

と、彼の本心も Menas と同じであったから、口に出さずに黙ってやってくれるべきだったと彼を叱っている。彼は Antony がローマにいない間に権力を奪おうとして反乱を起こしたのであったが、Antony が帰ってきたために彼の計画は失敗して、Menas がその弱腰を批判するように (“Thy father, Pompey, would ne'er have made this treaty.” 2. 6. 82-83)、不利な条件で和解してしまった。そしてその後、今度は逆に Caesar と Lepidus に攻撃されて滅ぼされてしまうのである。この Pompey 事件は戯画化され滑稽化されているが、この劇における政治の世界をより象徴していて、いかに政治家の主張する「正義」が空虚なもので、彼等の目的は権力以外には何もないということを教えているといえよう。Bradley は、

The lordship of the world, we ask ourselves, what is it worth, and in what spirit do these 'world-sharers' contend for it? …………… Their aims, for all we see, are as personal as if they were captains of banditti; and they are followed merely from self-interest or private attachment. The scene on Pompey's galley is full of this irony.<sup>8</sup>

と、世界の分割者達は山賊の頭のように利己的で、自己の利益追求のみを考えているとローマの政治家を批判している。Pompey がこのような政治家の戯画であるとすれば、その陽画が Caesar であり、その失敗例が Pompey とすれば Caesar はその成功の例である。

劇の前半で Antony が Caesar にその過失を告発される場があったが、それと対照的に後半には Caesar が Antony に告発される場があって、それが政治の世界における両者の正、悪の立場が逆転したことを象徴しているようだ。

そこでは、第一に Pompey を Sicily で破った時 Caesar は Antony にその占領地を分け与えなかった事、第二に彼は Antony に借りた船を返さなかった事、第三に不当にも Lepidus を失脚させ、彼の財産を一人占めにした事が指摘されて、彼の「正義」の裏面が暴露されている。最後の点は Eros も触れていたから彼の「悪」は動かしがたい事実と言える。

彼の利己主義と共に、人間の冷酷さが劇の後半になると明らかにされてきて、その顕著な例として Enobarbus の逃亡事件がある。この事件は Caesar の冷酷さを教えるだけでなくそれと対照的に Antony の寛大さを伝える挿話となっている。Enobarbus は Actium の戦いで Antony の行動に失望し、遂に Antony を見限って Caesar 側に逃亡する。ところが Antony は、裏切った彼を責めないで寛大にも後から彼の荷物を送ってきてくれたのである。それに反し Caesar は、Alexas の場合にみられるように、逃亡者を利用するだけ利用して用済みになれば冷酷に殺してしまう人間でしかなかった。

Eno. Alexas did revolt, and went to Jewry  
on  
Affairs of Antony; there did dissuade  
Great Herod to incline himself to Caesar  
And leave his master Antony: for this  
pains  
Caesar hath hanged him……………  
……………I have done ill,  
Of which I do accuse myself so sorely  
That I will joy no more.  
(4. 6, 12-20)

この Caesar の appearance と reality の相違、二枚舌の態度が一番強調されて、更に劇化されているのが、最後の二場の Cleopatra との駆引である。彼は

Bid her have good heart:  
She soon shall know of us, by some of ours,  
How honourable and how kindly we  
Determine for her; for Caesar cannot live  
To be ungentle.

(5. 1. 55-60)

というように、Cleopatra にいかにも自分が親切で寛大に彼女に恩恵を施そうとしているかという顔を見せるが、それには下心があって、彼の本心は彼女をローマに

連れ帰りその凱旋で彼女を飾り物として利用し、自らの栄光を一層大きくして、歴史に残るような絶対的永遠にしたいだけなのである。(“…her life in Rome/Would be eternal in our triumph.” Ibid. 65-66). それにしても Caesar はあまりにも自分で自分のことをよく言い過ぎるし (“How honourable and how kindly we/Determine for her; for Caesar cannot live/To be ungentle.” 5. 1. 57-59). Antony との戦いについても

Go with me to my tent, where you shall  
see  
How hardly I was drawn into this war,  
How calm and gentle I proceeded still  
In all my writings.

(5. 1. 73-77 下線筆者)

と自らを正当化しようとするために、その言葉と行動の落差から逆に彼の「正義」の相対性を浮彫りにしてしまっている。

一方 Cleopatra は既に自殺の覚悟をしているが (“…what’s brave, what’s noble,/Let’s do it after the high Roman fashion,” 4. 5. 86-87), Caesar を騙すために彼の前で生きたがっている演技をする。しばしば問題になる Seleucus との口論はその一例とみてよいであろう。Seleucus は Caesar に、Cleopatra が財産の一部を隠していると告発するが、それは D. Wilson のように “She had a little rehearsing with Seleucus…”<sup>9</sup> とまでは言わないにしても、彼や K. Mnir の言うように、財産を隠しているという事で Cleopatra は Caesar に、自殺する意志はないんだという態度を見せて彼を欺こうとしている、と考えていいだろう。

But there is no reason to doubt……………  
that Cleopatra was pretending that she wanted to live so that Caesar would be hoodwinked.<sup>10</sup>

そして彼女自身は、この事で Caesar が自分に寛大さを見せる時、それは彼女に自殺されては困るから甘言を言っているに過ぎないと、彼の二枚舌振りを見抜いている。 (“He words me, girls, he words me, that I should not/Be noble to myself.”

5. 2. 190-91)

こうして Cleopatra は Caesar の意のままになる振りを見ながら、最後に自殺をして完全に Caesar の栄光を相対化してしまうのである。

Cleopatra が自殺をするかしないかは、この劇が悲劇になるか Ernest Schanzer<sup>11</sup> の言うような問題劇になるかの分岐点であって、もし彼女が自殺をせずにローマに行くことになれば Caesar の正義、栄光は絶対化され



るが、彼女と Antony の愛は、結局世俗的な情欲の愛でしかなかったと相対化される。勿論彼女はこの事がよくわかっていて、ローマに行けば下役人に売春婦のように捕えられ、舞台では二人の愛は酔払いと売春婦の卑しい愛として相対化されて演じられるのを確信している。

.....saucy lictors  
Will catch us like strumpets, and scald  
rhymers  
Ballad us out o'tune; the quick comedians  
Extemporally will stage us and present  
Our Alexandrian revels; Antony  
Shall be brought drunken forth, and I shall  
see  
Some squeaking Cleopatra boy my greatness  
I th' posture of a whore.

(5. 2. 213-20)

逆に自殺をすれば、それは Antony への殉死という形になり、二人の愛の真実性、絶対性が証明され、同時に Caesar の存在を相対化してしまう。

Cleo. O, couldst thou speak,  
That I might hear thee call great Caesar  
ass,  
Unpolicied!

(Ibid. 305-07)

この劇ではここにあるような“Unpolicied”, “betray”の類の語が頻出し、それが「相対化」のモチーフと深く結びついていて、最後に Cleopatra の自殺を知った Caesar の家来が“Caesar's beguiled” (Ibid. 322) と言うのは中でも象徴的だ。“great Caesar”は“ass”と見事に相対化されてしまう。

このように Cleopatra の死は政治の世界の「正義」を相対化した一方で、Antony との愛を高い次元の絶対の永遠にしてしまう。Antony の死後は、Cleopatra は Antony をまるで神であるかのように宇宙的レベルで絶対化するようになり、

His face was as the heavens, and there in  
stuck  
A sun and moon, which kept their course  
and lighted  
The little O, the earth.

(Ibid. 79-81)

Antony の存在は“Fancy”が及ばない“Nature”の一大傑作だと大賛辞を送り (“’t imagine / An Antony were Nature's piece 'gainst Fancy...”5. 2. 97-98), もはや劇の前半に見られたような彼の相対化は全くない。確かに Agrippa が指摘するように全人間的に見れ

ば、Cleopatra の絶対化にもかかわらず Antony にも欠点はあった。

Agr. A rarer spirit never  
Did steer humanity: but you, gods, will  
give us  
Some faults to make us men.  
(5. 1. 31-33)

しかしその欠点は、ただ単に Antony に限らず人間である以上避けられないもので、自らの過ちを認めない Caesar にも十分当嵌るものである。特に力が正義である政治の世界では「絶対」は存在しない。Antony は言うなれば Caesar の鏡になっていて、Maecenas の言うように、Caesar は Antony の中に己の姿を見て彼の政治的過ちは自分のものだと思えばならない。実に Caesar は Antony という鏡によってもその無誤謬性が相対化されるのである。

Maec. When such a spacious mirror's set  
before him,  
He needs must see himself.  
(Ibid. 34-35)

政治の世界では相対化された Antony も、愛の世界では最後に「絶対」を得る。Antony 同様、Cleopatra も靈魂の永遠不滅性を信じ (“I have/Immortal longings in me.” 5. 2. 279-280), 自ら火と空気になって (“I am fire and air.” Ibid. 288), 晴れて妻として Antony の待っている Elysium へ旅立ってゆく。彼女には、Antony が彼女の自殺を誉め称えて呼んでいるのが聞こえるのだ。

Methinks I hear  
Antony call; I see him rouse himself  
To praise my noble act;.....  
.....Husband, I come:  
Now to that name my courage prove my title!  
(Ibid. 282-87)

こうして二人の愛は、疑い、裏切り、気まぐれ等の世俗の愛が持つ通弊にもまれながらもそれによく耐えて、霊の世界で夫婦という形で愛が結実し、永遠の絶対性を得るのである。Othello の愛は地上の愛の陥穿に落入ったが、Antony and Cleopatra の愛は見事にそれを乗り越えたと言えよう。結局、Shakespeare が Antony and Cleopatra で意図したものは、この Othello の超克ではなかっただろうか。現実世界で限界のある愛には霊的世界でその可能性がある。

(注) テキストはすべて The New Cambridge 版を使用した。

1. cf Notes of the New Cambridge Shakespeare *Antony and Cleopatra* (ed. J. D. Wilson), p. 187. pp.1-5.

After noting that Ant's treatment of Octavia made every man 'hate him' in Rome, Plut. (Sk. 201) continues: "But yet the greatest cause of their malice unto him was for the division of lands he made amongst his children in the city of Alexandria....."

2. A. C. Bradley, *Oxford Lectures on Poetry*, (1909; rpt. Macmillan, 1950), p. 296.
3. Ibid., p. 304.
4. K. Muir, *Shakespeare's Tragic Sequence*, (Hutchinson U. Library, 1972), p. 164.
5. Julian Markels, "The Pillar of the World", *Twentieth Century Interpretations of Antony and Cleopatra*, ed. Mark Rose, (Prentice-Hall, Inc., 1977), p. 24.
6. cf. Introduction of *Antony and Cleopatra*, p. xxi.
7. Bradley, op. cit., p. 289.
8. Ibid., p. 291.
9. D. Wilson, p. xxxv.
10. K. Muir, op. cit., p. 166.
11. See Ernest Schanzer, *The Problem Plays of Shakespeare* (1963)